

ドイツにおけるスピノザ主義の基本構図

——後期啓蒙から汎神論論争まで——

平 尾 昌 宏

Spinozism in Germany—From Enlightenment to Romanticism—

HIRAO Masahiro

前書き

本稿は後期啓蒙の時代からイエナ・ロマン派に至る、ドイツにおけるスピノザ主義を巡る基本構図を描こうとする試みの一部である¹⁾。「スピノザ主義」の研究は、ゲーテやヘルダーを取り上げることが多く、これはいずれかと言えば文学史研究の文脈で行われている。一方、哲学史研究の範疇では、「ドイツ観念論」研究の文脈で「スピノザ主義」の意義がしばしば強調される。問題なのは、この二つのコンテクストが関係付けられることが少ないように思われることである。逆に言えば、文学史研究においてはロマン派時代におけるスピノザ主義はあまり注意されず²⁾、一方、哲学史研究においては「ドイツ観念論」以外のスピノザ主義が視野から消えているという印象があるのである。われわれが後期啓

平成18年6月29日 原稿受理

大阪産業大学 教養部 非常勤講師

- 1) 本稿は元は後期啓蒙からイエナ・ロマン派までのスピノザ主義を扱う論文の一部であったが、事実の記述だけでも分量的に大きなものとなったので、その一部をここに切り出した。そのためかなり見通しが利き難いところがあることは承知している。ご面倒でも、後続の部分と併せてお読みいただきたいと思う。なお、本稿には調査不足による欠陥が多々あると思われるが、二つの点で公表の意味があると考えた。一つには、特にわが国ではスピノザ主義の歴史についての見通しを示した研究が少ないこと、その見通しが現在までのわれわれの調査の範囲でもある程度まで示し得ると思われたことである。見落としについては、大方の御教示をお願いしたい。
- 2) スピノザ主義研究の多くはゲーテ時代迄を扱い、ロマン派を扱わない。この方面を代表するTimm [1974] やBell [1984], Lindner [1960], 最近のGoetschel [2004] も同じである。

蒙の時代からドイツロマン派、ドイツ観念論の時代までのスピノザ主義を連続した流れの上で捉えようとするのは、こうした断絶を少しでも乗り越えたいと考えるからである。

しかし、この、「非哲学的」であり面白みのない作業が改めて必要だと思われたのは、この時代のドイツ思想研究にとって自明であることがスピノザ研究者にとっては驚きないし不可解であり、逆にスピノザ研究者にとって当然のことがドイツ・ロマン派やドイツ観念論研究者に通用するとは限らないからである。われわれの意図は、この両者の間に架橋を試みることでもある。しかしそのためにも、ロマン派におけるスピノザ受容だけを取り上げるという行き方は上策ではない。それ以前、特に後期啓蒙、シュトルム・ウント・ドラングからロマン派直前の状況の確認の上で初めて、ロマン派のスピノザ受容の意味も明らかになる。このうち本稿が直接に扱うのは、啓蒙主義後期から汎神論論争の時代までである。

扱う範囲が広がるだけに、個々の思想家におけるスピノザ受容の検討という方法もここでは取らない。われわれが取り上げたいのは、特定の思想家の「スピノザ主義」ではなく、スピノザ主義の歴史だからである³⁾。文学史、哲学史においては、個別の思想家の独自性が命であるという側面がある。われわれはこれを否定しようとは思わない。しかし、

3) 個々の思想家に関する参考文献は必要に応じて触れるが、スピノザ主義についてのまとまった研究としてはTimm [1974] や工藤 [1980] らが参考になる(工藤 [1980] は日本においては他に類例のない著作であり、本稿もこれに、細部で見解を異にすることはあっても、基本的に大いに助けられたこと、と言うよりも、そもそもこの著作がなければ本稿程度のものも構想し得なかったことは明記しておかねばならない。この著作は研究者たちにはほとんど参照されていないように思われるので、この点を特に注意しておきたい)。他に、焦点を絞ったものとしては、Bell [1984] を挙げることもできるが、しかし、これは個々の思想家に焦点を当てる形をとっており、そのために全体的な見通しが必ずしも明確でない憾みがある。印象を語ってよければ、恐らくそれは本文中で述べたことと重なるが、Bell [1984] に代表される研究の多くは「スピノザ主義」の研究というよりは、レッシングやメンデルスゾーン、ゲーテやヘルダーといった人々の研究の一環として、スピノザからの影響、スピノザ哲学の受容を取り上げているからではないかと思われる。これに対して、われわれがここで考えようとするのは、「スピノザ主義」であって「スピノザ哲学そのもの」ではないし、「スピノザ主義者」と見られる思想家たちでもない。この他、平尾 [2004a] でも幾らか文献を掲げておいた。また、論集としては、特に本稿にとってはSchuermann, Waszek und Weinreich (Hg.) [2002] が最も役立った。以下本稿においてはここに収録された個々の論文について詳しく論及できない場合もあるが、それぞれの分野の専門家の手になる論文を集めたこの論集は、ドイツのスピノザ主義に関して論じるべき主要項目をほぼ網羅しており、少なくとも手がかりとして最も便利である。なお、日本ではスピノザ主義に関するまとまった研究が少ないので、参考のために本稿では出来るだけ多くの文献に触れておくことにする。

その独自性が輝くのは、彼らがその置かれていた歴史的状況を超出しているからであるとすれば、その超出の意味を明らかにするためにも、その地盤となる歴史的状況を確認しておくことも必要であろう。

そのためにわれわれはここで、単に哲学的というよりは、もっと広い意味でのスピノザ主義を想定し、かつ、主流の哲学に属さない思想家、文学者たちも取り上げたいと思う。つまりわれわれは、「スピノザ主義」とは何であるかを問いたいのではない。むしろ、人々が何を「スピノザ主義」と呼んだのか、を見たいのである。そして、個々の論者の、また、哲学的ないしイデオロギー的な論点の個々を取り出すのではなく、むしろ、ドイツにおける「スピノザ主義」の見取り図を、その現象形態に即して描こうとする。なぜなら、ゲーテにしる、シュリングにしる、シュレーゲルにしる、彼らにおけるスピノザ受容や彼らの「スピノザ主義」を直接問題にすることは、却って問題を混乱させるだけのようと思われるからである。ディルタイがレッシング論の中で正当に警告しているように、「レッシングはスピノザ主義者だったか」と問うてはならない⁴⁾。なぜなら、その問いには「否」と答えるしかないからである。同じことは他の思想家に関しても言える。われわれが問題にするような思想家であるならば、彼らが独自性を持っているのは明らかであり、そうでないならわざわざ取り上げるまでもないであろう。その意味では、ディルタイ自身が「ゲーテのスピノザ研究」においてはこの戒めを適用せず、ゲーテはスピノザ主義者ではないと主張しているのは奇妙である⁵⁾。しかし、もし逆に、「然り、彼はスピノザ主義者であった」と答えるにしても、そこには常に「しかし彼はスピノザ哲学を理解していなかった」という反論があり得るだろう⁶⁾。更に、「彼はスピノザ主義者であった」、「彼のスピノザ理解は正確ではない」に加えて、「彼はスピノザ主義者ではない」という主張も無論あり得る。この主張はとりわけ、スピノザを宿命論、無神論、唯物論と解する論者の場合に多くなる⁷⁾。

4) Dilthey, Schriften, XXIV, S. 102-3 (ディルタイ, 188頁).

5) Dilthey, Schriften, II, 118-141.その点で、まず初期(1755年までの)レッシングのスピノザ理解から固めてゆこうとする笠原[1985]は慎重である。ただし、その場合にも、「スピノザ主義」とはそもそも何であるかという巨大な問題が立ちはだかる。

6) Bell [1984]は結論部分で、ゲーテやヘルダーのスピノザ理解の程度を計り、時代が進むに従ってあたかもその理解が正確になるかのように描いているが、これはあまり成功しているように思えないばかりか、議論としても余計であるように思われる。Baumgardt [1927]が、個々の思想家の理解がどうあれ、「ドイツのスピノザ主義」はそれ自体とした流れを持つとしている点は重要である。ただし、Baumgardtのこの論文自体は事例の羅列に留まるように思われるが。

7) ただし、例えばLindner [1960]のように、論者自身が唯物論の立場を取る場合には、スピノザ主義のそうした側面がドイツ思想に与えた影響が大きく見積もられることになる。

つまりこれらは、一見その結論において異なるように見えるものの、実は異なっているのは結論以上に研究者たち自身の論点であり視点であるように思われるのである。

われわれはこうした混乱を一旦抜け出して、「彼はスピノザ主義者であったか」を問うより前に済ませておくべき作業があると考ええる。つまり、彼らがそれぞれにスピノザを 수용した状況の確認である。だがまずは、なぜそうした確認が必要であるのかを述べておこう。それこそがわれわれの意図を明確することにもなるからである。

「僕はスピノザ主義者になった」？——手がかりとしてのシェリング

内田百間は「特別阿呆列車」の旅の帰りの車中で、同行のヒマラヤ山系氏に次のような話を聞かされる⁸⁾。宿に3人で泊まったとき、1人10円ずつ払って30円の部屋に泊った。部屋に入ってから宿代の30円を帳場に届けさせた。しかし、宿の主人が5円負けてくれて、女中にその5円を持たせて部屋まで届けさせてくれたのだが、女中は途中で2円を自分の懐に入れ、3人に1円ずつ返した。3人は1人9円ずつ払ったことになるから $9 \times 3 = 27$ 円。それに女中がくすねた2円を加えて29円。はて、残り1円はどこへ消えたか。

例えばロマン派とスピノザを架橋しようとするのは、この消えた1円を探す作業のように思える。「何も隠されていない」にも関わらず、われわれはどこか誤誘導されている。こうした場合に必要なのは、この消えた1円を探すことではなく、なぜ1円が消えたように見えるかを探る試みである。

例えばシェリングの場合を瞥見してみよう。問題を明らかにするために率直に言えば、彼のスピノザについての発言には、スピノザの読者には意味不明な箇所が多い。若きシェリングの「スピノチスト宣言」として知られ、しばしば引かれるヘーゲル宛書簡(1795)も、われわれを戸惑わせるに十分である。

「正統派の神概念はもはや僕らには関係がない。僕の答えはこうだ。僕らは人格的実在よりもっと先に至り着く。僕はスピノザ主義者になった！……スピノザにあっては世界……が全てだった。僕の場合、自我が全てだ。」(HB, I, 22.)

「正統派の神概念」を排するのに「スピノザ主義」を持ち出すことは一応領けるとしても、「自我が全てだ」と叫ぶ人物をどうして「スピノザ主義者」と見なせようか。あるいは、初期シェリングが哲学の基礎付けのために依拠した「知的直観」についても「平行論」にしても、スピノザから見れば1円分だけずれているように感じる。しかもその1円は、われわれが欲しいものを手に入れるためにどうしても必要なものであるように思える。

8) 百間全集, 14巻, 40頁を参照。

「シェリングとスピノザ（主義）」という主題⁹⁾が論じ尽くされているかに見え、かつ、それが少数の観点の反復に留まり、紋切り型となってわれわれの食傷を誘うにも関わらず、常にずれが残るのは、そのずれが時代的な状況の構造的な布置から生じるものだからではないか。コプルストンは、カント以降の観念論者たちが共感を寄せたものとしてスピノザの名を挙げ、その「スピノザ」とは「ロマン化されたスピノザa romanticized Spinoza」だと断定している¹⁰⁾。しかし、「ロマン化されたスピノザ」とはどのようなものなのか。確かに、ここにある「スピノザ主義」は、コプルストンならずとも「変容されたスピノザ主義¹¹⁾」と言いたくなるようなものである。しかし、「ロマン化された」、「変容された」という修飾語は、ここで起っている事態を結果として捉えたものであるにすぎない。特に「ロマン化された」という形容が何も説明しないですむ万能の呪文でないとすれば、問題は、なぜ他ならぬスピノザが、「ロマン化される」という事態が起ったのか、ということではなければならない。いかなる哲学・思想であれ、全く透明なまま受け取られることはあり得ない。その意味で「ロマン化されたスピノザ主義」は、一つの固有な歴史現象、幾つもの事象や構造が重なりあって重層的に規定された歴史現象である。

見取り図

「僕にとっては自我が全てだ」というシェリングの発言が意味不明になるのは、それを直接スピノザと関係付ける場合である。この書簡を書いたのは、シェリングがスピノザを読んだからであるよりも、むしろフィヒテの『全知識学の基礎』第一部を読んだからである。したがって、この「自我」とは、シェリング読者にとって自明のようにフィヒテを念頭においたものである。その点を前提とすることによって、スピノザ読者にとっての無用の混乱を避けることができる。この後、シェリングが学界にデビューしてすぐの頃に既にラインホルトが、「シェリング氏のスピノザ化されたフィヒテ主義やフィヒテ化されたスピノザ主義」と言っている¹²⁾。

しかし、いずれの視点からも受け入れやすい事柄で、一見すると全く問題のなさそうに見える点であっても、それもまた歴史的な文脈の上にこそ成り立っている場合がある。例

9) シェリングのスピノザ主義については別に論じたいと考えている（その一端は平尾[2006a], [2007]で示した）が、研究状況について差し当っては、平尾[2004b], [2006a], [2006b]で少しく触れておいたので参照されたい。

10) Copleston [1985], p. 16.

11) Adler [1968], S. 26.

12) Lauth [1975], S. 203.

えば、上の書簡中に見られる「正統派の神概念」否定という論点である。「正統派の神概念」が超越的人格神を意味するとすれば、この論点はスピノザ哲学の基本的な主張であるから、この点で「スピノザ主義」を持ち出すのは特に不自然ではない。しかしこれも、この時代の文脈の一般的な理解を介することでより明確になる。即ち、上のシェリングの言葉は、それ自体いわば「引用」、「もはや正統派の神概念は私にとってはあり得ません」(JW, IV, 53.)¹³⁾ という、ヤコービとの対話におけるレッシングの言葉の明らかな言い換えだからである。後にも触れるが、ヤコービのいわゆる『スピノザ書簡』に描かれたヤコービとレッシングとのこの対話こそ汎神論論争の契機となったものであった。こうして、この時代のスピノザ主義理解に必要な項目として、フィヒテに次いで、第二の項目、即ちヤコービの『スピノザ書簡』と、それを契機とする汎神論論争が現れてくる。

これも、なんら新しい論点ではない。ヤコービや汎神論論争に関しては、国内外で多くの優れた研究があるから、改めて述べるべきことは少ない¹⁴⁾。しかし、スピノザ批判者であったヤコービの著作が、皮肉なことに多くの人をスピノザへと導いたこと、そのことがスピノザ主義の歴史にとっても決定的な、敢えて言うなら「歪み」を与えたことは確認しておくべきであろう。ゲッチェルはこの「歪み」を取り除こうとしているが¹⁵⁾、その「歪み」自体が影響を与えたことは歴史的事実であって、スピノザの思想の歴史的価値を評価する方向に向かうゲッチェルと異なって、歴史的な研究に踏み止まろうとするわれわれにとって、これは無視することができない。例えば、シェリングの修業時代、彼を含むヘルダリン、ヘーゲルらとの交流の中では、「ヘン・カイ・パーン」という決定的な標語とスピノザ主義とが結び付いていたとされる。しかしこの結び付きもまた、スピノザの読者にとっては少なくとも即解できるものではない。逆にシェリングの読者にとっては常識と化しているために、これもまたその由来はもはや問題とされない。しかし、その常識がスピノザ読者の目を通して見るなら、一種異様なものと化す。そもそも、なぜスピノザ主義とこの言葉、しかもギリシャ語の言葉なのだろうか。無論、スピノザの一元論を、たまたまギリシャ語で表現しただけであり、それがギリシャ語の標語としての語呂から普及したのだと考えることはできようし、この観点から、すなわち「全一論」の観点からスピノザ

13) 私は現在のところ、ヤコービの新版全集、特にSchriften zum Spinozastreit, Hg. von Hammacher, Klaus und Piske, Irmgard-Maria (Werke, Bd. 1), 1998を見る事が出来ない。ここでは旧著作集ケッペン版を用いるしかなかった。幸い、マイナー社の哲学文庫には新全集に依拠した『スピノザ書簡』が収録されている。しかし、従来研究者は多くケッペン版から引用してきたため、新全集登場後も出典指示にはケッペン版を使う方がよいのではないかとも思える。哲学文庫ではいずれの版の頁数も示してあって便利である。

14) 例えば工藤 [1980] の第四章を参照。

15) Goetschel [2004], p. 17.

を読む論者は現代でも存在する¹⁶⁾。この組み合わせは、したがって全く無根拠なものと言うことはできないが、釈然としない思いは残る。この疑問を取り上げたアスマンは、この結びつきの隠された起源をカドワースに見ている¹⁷⁾。その正否はここでは問題にしないが、端的に言って、この結びつきがこの時代に人々の口に登った直接の切っ掛けは、やはりヤコービの著作であろう¹⁸⁾。いずれにせよ、この時代の「スピノザ主義」にヤコービがしっかり食い込んでいることは何度確認しておいてもよい。

ヤコービ

こうして、シェリングが「スピノザ主義者になった」のは、ヤコービとフィヒテという二つの地盤の上においてである。上のシェリングの書簡が書かれたのは、いわゆるロマン派の形成の直前の時期であるが、シェリングとほぼ同世代のロマン派の人々も、やはりこうした枠組みの中でスピノザを受容したのではないかと考えられる。そこでここでは、まずはヤコービがスピノザをどのように受け取ったかについて概観しておこう。

汎神論論争についてはわが国でも広く知られており、紹介・研究も多いので、ここで詳しく述べる必要はないだろうが、基本的な点を一応確認しておこう。1781年にレッシングが死んだ後、メンデルスゾーンがレッシングについて回顧を書いている時、生前のレッシングから彼がスピノザ主義者であったことを聞かされていたヤコービは、そのことをメンデルスゾーンに伝える。亡き盟友が悪名高きスピノザの徒であったことなど、メンデルスゾーンにとっては寝耳に水であった。メンデルスゾーンとヤコービは書簡で意見を交換するが、やがてヤコービはメンデルスゾーンに無断でレッシングと交わした対話の記録、メンデルスゾーンとの往復書簡を出版してしまう。1785年の、いわゆる『スピノザ書簡』である。これを契機としてメンデルスゾーンとヤコービの間の論争から広がり、更にヘルダー、ゲーテ、カントら当時の有力思想家たちを巻き込んだ大論争に発展する……。この論争の結果生じた事態として重要なのは、無神論者と見られ禁忌の的であったスピノザ主義が公に議論されるようになりドイツ思想界に大きな影響を持つに至ったこと、いわゆる「スピノザ・ルネッサンス」である。また、ティムが主題的に論じているように、それに伴って宗教と哲学の関係の問題が人々に改めて意識されるようになったことも挙げられよう。

しかし、既に注意しておいたように、ヤコービが喧伝した通りレッシングが「スピノザ

16) 例えばクラマー [1986] がそうである。

17) Assmann [1989] はこの問題の追求のなかで、ヘルメス思想の復興の問題に至るのだが、その出発点に挙げているのは、われわれと同じ疑問である (S. 38-9)。

18) その背景については、われわれも後に触れるが、安酸 [1998]、第七章が参考になった。

主義者」であったかどうかといった問題や、ヤコービのスピノザ論やそこに盛られた思想それ自体、また汎神論論争そのものはわれわれの考察の対象ではない。われわれの視点は、ヤコービのスピノザ論がどこから来て、そしてどのように影響したかである。例えば、『スピノザ書簡』には、一見すると奇妙な点がある。これは、「汎神論論争」という大事件とその結果に目を奪われるとそのまま見過ごしてしまえる程度のものであるが、歴史的な観点から見れば、一瞥しておく価値がある。ヤコービは、彼のスピノザ理解を六項目にまとめている (JW, IV, 216-223.)。

- 一 スピノザ主義は無神論である。
- 二 カバラ主義哲学は未発達のあるいは混乱したスピノザ主義である。
- 三 ライプニッツ-ヴォルフ哲学は、スピノザ哲学と同様に宿命論である。
- 四 どんな論証の道も宿命論に至る。
- 五 われわれが証明できるのは類似性のみであり、どんな証明も既に証明されたものを前提とするが、その原理は啓示である。

六 あらゆる人間的認識と活動の原点は信仰である。

ヤコービはスピノザ哲学を論証によって世界を覆い尽くすものと見て、それが結局は宿命論、無神論に至るとして批判し、悟性の観点においてはそれを正当と認めながら——それゆえヤコービは、逆説的ながら、スピノザを極めて高く評価する——、しかし自身はそこから「死の跳躍」によって信仰の世界あるいは世界そのものの外部へと脱出しようとする。こうしたヤコービの思考のうち、命題一と四は彼のスピノザ批判を、五と六は彼自身の観点を要約的に示すものとして理解できる。

しかし、二と三についてはどうであろうか。一見不必要にも思えるこの二つの命題は、しかし、ヤコービが属していた歴史的な脈を明確に示している。というのは、この二つの主張は既に17世紀に登場し、18世紀前半においてもごく普通に見られたものだからである。カバラ哲学とスピノザ主義との類縁性の主張に関して言えば、ヤコービ自身が引いている自由思想家バハターがいる。世紀の変わり目前後に登場した彼の著作『ユダヤ教におけるスピノザ主義』や『輝けるカバラ主義者』¹⁹⁾は18世紀前半からスピノザ主義批判のために利用されてきた²⁰⁾。しかし、より重要なのはスピノザ主義とライプニッツ-ヴォルフ哲学

19) Wachter, Johann Georg, Der Spinozismus im Juedenthumb, in: Schröder (Hg.) [1994-], Abt. I, Bd. I, Elucidarius cabalisticus, in: Schröder (Hg.) [1994-], Abt. I, Bd. II.

20) スピノザとカバラの関係については、Scholem [1984] やKilcher [1994] の論文を参照。これに近い時代では、シェリングとの関係で重要な思想家であるフランツ・バーダーが言及している (Baader, Werke, III, 383)他、サロモン・マイモンなどもこの点を指摘している。サロモン・マイモンとスピノザとの関連については本稿の続編で取り上げている。

の同一視である。この主張も初期啓蒙期に敬虔主義の神学者たち、とりわけヨアヒム・ランゲがヴォルフ哲学を攻撃するために持ち出した図式であり、それをここでのヤコービも、ライプニッツ＝ヴォルフ哲学を基盤とするベルリン啓蒙主義攻撃のために再利用したのであるかに見える。実際、ランゲとヤコービの議論には重なるところが多い²¹⁾。無論、スピノザとライプニッツの近さについては、後に見るようにメンデルスゾーンが著作『対話』において取り上げていた²²⁾。しかし、〈スピノザ＝ライプニッツ〉の構図を、運命論、無神論という非難と結びつけている点において、ヤコービはメンデルスゾーンとは違っており、これによってヤコービのスタンスが明確に分かる。実際、ヤコービが記録しているレッシングとの問題の対話でも、スピノザとライプニッツとの関係は一つの焦点となっている²³⁾——あるいはヤコービがそうしている——とも見える（JW, IV, 63-67）。

われわれが残念に思うのは、ヤコービが同世代や後輩世代に与えた影響について、即ち

-
- 21) 平尾 [2004a] の執筆時、ランゲのライプニッツ＝ヴォルフ哲学への批判を主題に取りあげた論文はほとんど見出せなかった（ただし、ヴォルフの反論、それに伴うヴォルフのスピノザ批判に焦点を宛てた研究はある）が、一つ全く見落としていたものがBianco [1989] である。Bianco [1993] は言及しておいたが、それ以前に出ているこの優れた研究の参照を怠ったのは残念である。平尾 [2004a] はスピノザ主義を主題とし、Bianco [1989] はスピノザ主義については傍論に留めているという視点の違いはあるが、この論文は周到な研究であり、重要な論点は提示している。特に今回のわれわれの議論に関わる点で言えば、ヴォルフ＝ランゲ論争の後への影響を論じた部分である。そこでBiancoはランゲとヤコービの議論の類似性は明白だと指摘している（特にS. 134-4）。なお、この論点は、Marco M. Olivetti, *Da Leibniz a Bayle, alleradici degli >Spinozabriefe<*, in: *Lo spinozismo ieri e oggi*, in: *Archivio di Filosofia*, 48 (1978), Nr. 1, S. 147-199で既に出ていた論点であるという（Bianco [1989], S. 153 (Anm. 113)）。
- 22) カント主義者のハイデンライヒは著作『スピノザによる自然と神』において、メンデルスゾーン以前にスピノザとライプニッツを同一視した論者としてランゲを挙げ、詳しく紹介している（Heydenreich, S. 91-102）。この点、Hammacher [1986] が具体的な出典を明示しない形ではあるが指摘しており（S. 218）、またBianco [1989] も注の中でではあるが触れている（S. 154, Anm. 124）。なおヤコービはその後に出した『スピノザ書簡』第二版においてはハイデンライヒに触れている（IV-2, S. 122）。ランゲ、メンデルスゾーン、レッシング、ヤコービ、ハイデンライヒ、更にはマイモンに見られる以上の論を一連の系譜として見れば、Bianco [1989] がそうしているようにピエティズムの影響史として捉えることもできるし、また、メンデルスゾーンの『対話』の受容史の興味深い一例としても見ることができよう。
- 23) 18世紀の哲学史におけるライプニッツ記述を論じたZimmerli [1986] は、カント時代のライプニッツ観を分類し、ライプニッツをヴォルフとの関係で捉えるタイプ、カントとの関係で捉えるタイプと並んで、スピノザとの関係で捉えているタイプを挙げ、その代表としてヤコービを挙げている（S. 161）。

ヤコービの所論を契機とする汎神論論争や、ドイツ観念論との関係についてはしばしば論じられるものの、ヤコービ自身について、特に彼の歴史的な位置や彼に対する先行思想の影響についてはほとんど論じられていないように見えるということ²⁴⁾である。そのため「スピノザ主義」は彼によっていきなりドイツ思想界に持ち込まれたかのように見えてしまう。しかし、命題二や三に現れているように、ヤコービのスピノザ主義論には、明確に歴史的な源泉を指摘することができるのである。

メンデルスゾーン、レッシング——後期啓蒙

では、ヤコービによって渦中に投げ込まれたレッシングとメンデルスゾーンはどうであったか。後期啓蒙主義に属する思想家、ともに1729年生まれのこの二人の哲学的素養の基本はライプニッツ-ヴォルフ哲学にある。上にも簡単に触れたように、ライプニッツ-ヴォルフ学派の啓蒙主義が確立する過程で、それがスピノザ主義であり無神論であるのではないかという論争が巻き起こった²⁵⁾。この、18世紀前半における啓蒙初期とは異なり、同じ世紀の後半、ライプニッツ、ヴォルフとスピノザとの関係については、かつて程の過剰反応は既に消えている。そのため、ヴォルフたちがライプニッツ-ヴォルフ哲学とスピノザ主義との差異を懸命に示そうとしたのに対して、メンデルスゾーンもレッシングも、ライプニッツとスピノザの近さを描くのに遠慮がない。その傾向を代表するのが、メンデルスゾーンの『哲学的対話』(1755)であり、レッシングの「ライプニッツはスピノザによって、ただ予定調和のきっかけを得たにすぎない」(c. 1763)である。

メンデルスゾーンの『対話』は、彼のドイツ語での最初の著作である²⁶⁾。その主題はライプニッツ哲学にあるが、話題の一つとしてスピノザ哲学とライプニッツ哲学との関係が取り上げられ、スピノザは、ライプニッツ以前に既に予定調和を発見していたとされる。これは、現代のスピノザ研究者からすれば、ライプニッツの予定調和とスピノザの平行論を混同したものでしかないであろうが、メンデルスゾーンのこの主張は、少なくとも、それまで「哲学史」の範疇に入れられさえしなかったスピノザ哲学を哲学史のなかに位置付けることに繋がる。ただし、メンデルスゾーンの意図は飽くまで主題であるライプニッツ哲学の歴史的な位置付けにあるのであって、スピノザを哲学的に正当に評価することには直接繋がらないことには注意しなければならない。メンデルスゾーンの印象的な言葉を用

24) 浅見の範囲では、Kuhn [1934] に幾らか見られる。

25) この論争については、既に触れたように平尾 [2004a] やBianco [1989] が詳しい。

26) Baumberger [1968], XVIII.

いれば、スピノザは哲学史において「貧乏くじを引いた」のである（MS, I, 349.）。しかし、こうした消極的な評価にも関わらず、ヴォルフたち初期啓蒙主義者とランゲたち敬虔主義の神学者たちとの激烈な論争の時点と比べると、メンデルスゾーンの視点の意味は明瞭である。メンデルスゾーンにとって、ライプニッツ哲学は自らの思想的な基盤ではあっても、同時に、既に歴史的な考察の対象となり得るものであり、スピノザとライプニッツの接近を語るという、かつてであれば危険きわまりない論点を持ち出すことにももう躊躇はない。極端な言い方をすれば、メンデルスゾーンにとって、ライプニッツは自身の哲学的な基盤ではあっても、ライプニッツは既に過去の哲学者であるように思われる。スピノザについても同じである。前期啓蒙の時代、スピノザは生々しい存在であった。それは敬虔主義者にとっても、それと対立する啓蒙主義者にとっても、厭わしい無神論者として「生きた思想」であって、それゆえに徹底して禁圧されねばならなかった。しかし、ヴォルフがスピノザ哲学を批判した結果、スピノザ哲学は葬り去られ、過去のものとなされ、それゆえに逆に「哲学史の画廊」に並べられた歴史的な存在となった。この当時の人々がスピノザに触れることがあったとしても、それはシュミットの独訳によるものであったが、その独訳にはヴォルフによるスピノザ批判が添えられていたのである²⁷⁾。その意味では、メンデルスゾーンの段階では、スピノザもライプニッツも歴史的に精算済みのものであったように思われる²⁸⁾。

しかし、同じく予定調和を巡って、更に一步踏み込んだように見えるのが、メンデルスゾーンとの交流から生まれた、レッシングの「スピノザを通してライプニッツはただ予定調和の手掛かりに至った」である。しかし、極めて短いこの試論だけからは、レッシングのスピノザ理解について決定的なことを読みとるのは難しい²⁹⁾。ただし、われわれの目的からすれば、すなわち、メンデルスゾーンとレッシングの例が、スピノザ主義理解のこの時代における顕著な、典型的な徴候を示しているという点を確認するためには、この断片は決定的な意味を持つ。すなわち、メンデルスゾーンとレッシングでは、微妙なニュアンス

27) この辺りの事情については平尾 [2004a] で述べた。

28) 同じメンデルスゾーンのスピノザ主義理解でも、ヤコービとメンデルスゾーンの論争の一部であり、メンデルスゾーンの晩年の作品である『朝の時間』、『レッシングの友へ』については別に考えなければならない。ここでのメンデルスゾーンは、ヤコービによって「スピノザ主義者」という「汚名」を帰せられたレッシングを擁護することを主眼としているため、『対話』とは明らかに性格を異にする。本文で後述する。この両著作に関しては、Strauss [1974] による綿密な序文が参考になる。

29) レッシングのスピノザ主義に関して最も重要とされるのは、この他に二つの断片があるが、事情はやはり同じで、確定的なことを言えるとは思えない。これら三点については、三好による翻訳と解説があるので参照されたい。

の差異こそあれ——その差異の意味については本稿の続編で触れる——，基本的にそのスピノザ理解はライプニッツ哲学をベースとした思考の上で受け取られているということである。そして，遡ればこの両哲学の異同を論じるという点では，後期啓蒙時代のスピノザ主義理解は，前期啓蒙時代のそれと同じ地平の上にある³⁰⁾。

繰り返して言えば，われわれは，レッシングがスピノザ主義者でないとか，あるいはライプニッツ主義者であると主張したいのではない。本稿で取り上げようとしているのはそれ以前の問題である。しかし，ここではライプニッツ主義ではなくスピノザ主義を主題としているのだから³¹⁾，少なくともレッシングならレッシングの「スピノザ主義」が彼のライプニッツ受容と関わりがあることは確認しておかなければならない。レッシングには，上記論文以外にライプニッツに触れた論文が幾つかある。そのことによって，レッシングとライプニッツとの関わりはそれ自体，事実として指摘できる。しかし，やや内容的に言えば，次のように考えることができよう。

上で触れたメンデルスゾーンの『対話』でもレッシングの上記論文でも，ライプニッツの予定調和とスピノザの平行論という，いわば理論哲学的な問題が主題化されていた。しかし，より実践的で，宗教に関わる問題，例えば悪の問題についてはどうであろうか。ライプニッツの場合，悪は神の正義を破壊するものであってはならないが，しかし，それがいわばこの世界の存立の必然的な条件であることが主張される。弁神論である。ライプニッツとレッシングにおける弁神論の問題を取り上げたトトクは，「レッシングの世界観においては，スピノザ主義的な教説のみならず，同時代の神学思想，理神論，とりわけライプニッツ哲学の影響が同時に受け入れられている」と言う³²⁾。無論トトクは，ライプニツ

30) われわれの論点からはややずれるが，レッシングのスピノザ主義に関しては，他に良知 [1956] が社会的な背景に触れていて興味深かった。18世紀前半のスピノザ主義について目を配ったものとして貴重な論文である。

31) われわれは基本的に，後期啓蒙から疾風怒濤の時代の人々がライプニッツ哲学のベースの上でスピノザを受容したこと，彼らのスピノザ受容はライプニッツ哲学に制約されていたと考える。しかし，ライプニッツの死後もヴォルフ学派の活動もあって影響力を保ってきたライプニッツ哲学が，一時退潮し，1780年代に復活したのだとする見方がある。例えば Lorenz [1997], S. 227を，詳しくはHeinekamp [1986b] を参照。それによれば，デュタン版のライプニッツ全集の刊行が1768年のことであり，それを契機にライプニッツ受容が盛んになったという。なお，「ライプニッツ・ルネッサンス」という捉え方はWundt, Max, Die deutsche Schulphilosophie im Zeitalter der Aufklärung (Heidelberger Abhandlungen zur Philosophie und ihrer Geschichte, 32), Olms, 1964, Nachdruck der Ausgabe 1945. によるもののようである。同様の見方は，Kondylis [1981] も示しており，シャフツベリーとスピノザの影響との交錯の中でライプニッツの復興がなされたとし (S. 576-595)，この図式の延長上でレッシングとヘルダーを捉えようとしている。

32) Totok [1986], S. 178.

ツのレッシングに対する影響関係を指摘するだけではなく、両者の弁神論的思考の差異を明確にしようとしている。しかし、スピノザは善悪を明確に相対的なものとし、一般的な意味での善悪は実在的なものではないと考えていた（『エチカ』第四部序文）。だとすれば、ライプニッツの弁神論とレッシングのそれとが異なっているとしても弁神論を問題にしていること——トトクはレッシングにとって弁神論の問題は中心的な位置を占めることを強調している³³⁾——において共通の地盤に立っている。しかし、スピノザにおいては、そもそも弁神論は問題となり得ない。したがって、もしレッシングがいわば「真のスピノザ主義者」であるかどうかを、スピノザとの直接的な関係において計るとすれば、レッシングは次のいずれかでなければならないことになる。すなわち、レッシングは真のスピノザ主義であり、したがって明確にライプニッツ的な基盤を否定していたか、そうでなければ、飽くまでライプニッツ的な基盤の上に留まり、スピノザ主義者でなかったか。われわれはこのいずれであるのかを決定しようとは思わない。こうした二者択一は「真のスピノザ主義」を想定することから生じるものであって、少なくとも目下のわれわれの主題ではない。しかし、以上の考察から分かることは、レッシングならレッシングの「スピノザ主義」ないしスピノザ理解を、理論的な領域で捉えるか、それともより実践的な領域で捉えるかによって違って見えてくること、そして、いずれにせよ、レッシングのスピノザ主義を問題にする場合には、レッシングのライプニッツ受容が同時に問題になることである。

再びヤコービについて

そして、こうして見てきた上でヤコービに再び目をやれば、ヤコービも明らかに旧来の図式の反復者であるという一面を持つことが分かる。〈スピノザとライプニッツ〉という図式は、前期啓蒙、後期啓蒙、そしてヤコービへと受け継がれた連続性を持つ。時代錯誤にも現れた過去の亡霊としてのみ遇するには複雑な顔を持ち過ぎているヤコービであるが、同時に彼は対他的には問題を極めて単純化していると言える。上に見たように、ヤコービがスピノザ主義とライプニッツ-ヴォルフ哲学の同一性を主張するのは、ヤコービ自身が敬虔主義と同じ枠組みでスピノザ主義を見ていることを示すばかりか、その枠組みを極めて巧妙に活用していることを示している。〈スピノザ主義=ライプニッツ哲学〉であるとするれば³⁴⁾、レッシングがライプニッツ哲学に関わりを持つということだけで「スピノ

33) Totok [1986], S. 180.

34) ただし、ヤコービはスピノザとライプニッツを全面的に同一視しているわけではなく、その違いも認める。個性概念の有無においてである。この点は、『スピノザ書簡』第二版ノ

ザ主義者」であることになってしまうからである。したがって、ヤコービにとっての選択肢は、ライプニッツ哲学かスピノザ主義かではあり得ない。ライプニッツ＝スピノザ主義者であるか、そうでないか、でなければならない。

こうしてわれわれは、ヤコービにおいて、スピノザ主義は、一方においてライプニッツとの関係において——同一関係として——捉えられ、他方においては反スピノザ主義との対立関係において、二重に捉えられていることが分かる。そして、ヤコービ自身の意図は後者の対立関係を表立たせ、人々に極限の選択を強いることにある。その強いられた選択の上で、薄氷を踏むような際どい道を歩んだ——歩まされた？——のが晩年のメンデルスゾーンである。汎神論論争の渦中で書かれた『朝の時間』での彼は、ヤコービの設定した選択そのものを破壊することはできず、また「レッシング＝スピノザ主義者」というヤコービの証言を信じて、そうであってもレッシングを傷つけないで済むようにと、「スピノザ主義」を穏当なものへと純化し得る可能性を探る。先ほどの例で言えば、実践的な問題領域でのスピノザ主義の危険性を取り除き、牙を抜いたスピノザ主義を想定するわけである。しかし、おそらくその「純化されたスピノザ主義」は、もう「名のみスピノザ主義」でしかあり得ないであろう。

しかし、振り返ってみれば、ヤコービのこの戦術は実は半世紀前に敬虔主義者たちが啓蒙主義者たちに対して採った戦術であった。ただ、＜スピノザとライプニッツ＞という対の枠組みにおいて、半世紀前にはライプニッツ-ヴォルフ哲学が主題となっていたのに対して、この時代においては、ヤコービを通して、結果的にスピノザ主義が主題であるかのように見え出したという違いがあるだけである。無論、その後のスピノザ主義の影響の広さを考えれば、これは決定的な事態の変化である。しかし、その分われわれは、スピノザ主義の復活という汎神論論争の「結果」——ヤコービの意図するものではなかった結果——に眼を奪われて誤誘導されていないだろうか。無論これはヤコービのスピノザ論を低く評価するために言うのではないし、こうした連続性があったとしても、汎神論論争の歴史的な重要性は揺るがない。メンデルスゾーンとレッシングにおいてはライプニッツを論じるためにスピノザが召喚されていたのに対して、ヤコービの登場がスピノザそのものを主題化する契機となったことは、それ自体において動かし難い事実だからである。標語風と言

、の付録6において再び取り上げられる (IV-2, S. 97ff.)。第二版刊行時には、既にヘルダーの『神』は出ている。そのためヤコービはヘルダーの議論も意識して論じており、この付録6はヤコービによる少しくまとまったライプニッツ論となっている。ヤコービとライプニッツの関係に関しては、Hammacher [1986] を参照。それによれば、ヤコービのライプニッツ受容は二つのフェーズが区別でき、一つは＜スピノザとライプニッツ＞の対であり、もう一つは＜ライプニッツとカント＞の対であるという (S. 215)。

えば、ここにあるのは、＜ライプニッツとスピノザ＞から＜スピノザとライプニッツ＞への連続的な変化、変容である³⁵⁾。メンデルスゾーン、レッシングからヤコービに至るまでは、枠組みそのものは保存され、しかし、力点の移動が見られた。そして、その後に至って初めて、枠組みそのものが変容させられることになる。

以上によってわれわれは、この時代のスピノザ受容の歴史的な文脈を確認したが、これを通して、同時に二つの課題を得た。メンデルスゾーン、レッシング、ヤコービにおける＜スピノザとライプニッツ＞関係の把握を哲学的に検討すること、そして、その後このコンテキストがどのように変化するかを見通すことである。本稿は端緒にすぎないが、ここからは複数の線がほの見える。

＜一次文献とその邦訳＞

【著者アルファベット順】

- ◎Baader, Franz Xaver von, Sämtliche Werke, Hg. von Franz Hoffmann, et al., Scientia Verlag, 1987, Neudruck der 1854 Ausgabe.
- ◎Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, Briefe von und an Hegel, Hg. von Johannes Hoffmeister, 1961, Felix Meiner. [HB]
- ◎Heydenreich, Karl Heinrich, Natur und Gott nach Spinoza, 1797, ND, Culture et Civilisation, 1973 (Aetas Kantiana ; 98).
- ◎Jacobi, Friedrich Heinrich, Werke, Hg. von Friedrich Roth u. Friedrich Köppen, 1812-25.[JW]
- ◎Jacobi, Friedrich Heinrich, Über die Lehre des Spinoza in Briefen an den Herrn Moses Mendelssohn, auf der Grundlage der Ausgabe von Klaus Hammacher und Irmgard-Maria, Piske bearbeitet von Marion Lauschke (Philosophische Bibliothek, Bd. 517), Felix Meiner, 2000.
- ◎Lessing, Gotthold Ephraim, Gesammelte Werke, Hrsg. von Paul Rilla, 1968, Aufbau. [LW]
- ◎Mendelssohn, Moses, Gesammelte Schriften Jubiläumsausgabe, 1971-1974, Friedrich Frommann. [MS]

35) ＜スピノザとライプニッツ＞という対はあまりに自明に思えるせいか、この観点からスピノザ受容の歴史を辿ったものは意外に少ない。逆に、ライプニッツ受容史の文脈で、＜スピノザとライプニッツ＞について概観しているのがHeinekamp[1986a]である(XIII-XIV)。コンパクトだが、見通しを付けるのに参考になる。

【著者50音順】

- ◎内田百閒『新輯内田百閒全集』福武書店, 第14巻, 1986年所収.
- ◎レッシング, ゴットホルト・エーフライム (三好健司訳, 解説)「神の外における事物の实在性について／スピノザを通して, ライプニッツは, はじめて予定調和の手がかりに達した／啓示宗教の成立について」『大阪電気通信大学研究論集』(人文・社会科学編) 18号, 1982年.

<二次文献>

【編著者アルファベット順】

- ◎Adler, Emil [1968], Herder und die deutsche Aufklärung, Europa Verlag.
- ◎Assmann, Jan [1989], >Hen kai pan<. Ralph Cudworth und die Rehabilitierung der hermetischen Tradition, in: Monika Neugebauer-Wölk(Hg.), Aufklärung und Esoterik (Studien zum achtzehnten Jahrhundert, Bd. 24), Felix Meiner.
- ◎Baumberger, Fritz [1968], Einleitung, in: MS, Bd. I.
- ◎Baumgardt, David [1927], Spinoza und der deutsche Spinozismus, in: Kant-Studien, Bd. 32.
- ◎Bell, David [1984], Spinoza in Germany, University of London.
- ◎Bianco, Bruno [1989], Freiheit gegen Fatalismus. Zu Joachim Langes Kritik an Wolff, in: Norbert Hinske(Hg.), Zentren der Aufklärung I. Halle: Aufklärung und Pietismus (Wolfenbüttler Studien zur Aufklärung, 15).
- ◎Bianco, Bruno [1993], "Wolffianismus und katholische Aufklärung," in: Harn Klütting (Hg.), Katholische Aufklaerung -- Aufklaerung im katholischen Deutschland, Felix Meiner.
- ◎Copleston, Frederick [1985], A History of Philosophy, Vol., VII. Fichte to Nietzsche, Image.
- ◎Delf, Hanna, Schoeps, Julius H. und Walter, Manfred (Hg.) [1994], Spinoza in der europäischen Geistesgeschichte, Edition Hentrich.
- ◎Dilthey, Wilhelm [1894], Aus der Zeit der Spinozastudien Goethes, in: Dilthey, Gesammelte Schriften, Bd. II.
- ◎Dilthey, Wilhelm [1867], Lessing, in: Das Erlebnis und dieDichtung: Lessing, Goethe, Novalis, Hoelderlin, in: Dilthey, Gesammelte Schriften, Bd.XXVI.
- ◎Goetschel, Willi [2004], Spinoza's modernity. Mendelssohn, Lessing, and Heine, (Studies in German Jewish cultural history and literature), University of Wisconsin Press.
- ◎Hammacher, Klaus [1986], "Die Vernunft hat also nicht nur Vorstellung, sondern wirkliche Dinge zu Gegenständen." Zur nachkantischen Leibniz-Rezeption vornehmlich bei F. H. Jacobi, in: Heinekamp (Hg.) [1986].

- ◎Heinekamp, Albert (Hg.) [1986], Beiträge zur Wirkungs- und Rezeptionsgeschichte von Gottfried Wilhelm Leibniz (Studia Leibniziana. Supplementa, Vol. XXVI).
- ◎Heinekamp, Albert [1986a], Einleitung, in: Heinekamp (Hg.) [1986].
- ◎Heinekamp, Albert [1986b], Louis Dutens und seine Ausgabe der Opera omnia von Leibniz, in: Heinekamp (Hg.) [1986].
- ◎Kilcher, Andreas B. [1994], Kabala in der Maske der Philosophie. Zu einer Interpretationsfigur in der Spinoza-Literatur, in: Delf, Schöps und Walter (Hg.), [1994].
- ◎Kondylis, Panajotis [1981], Die Aufklärung in Rahmen des neuzeitlichen Rationalismus, Klett-Cotta.
- ◎Kuhn, J. [1934], Jacobi und die Philosophie seiner Zeit, Minerva, 1967, ND. von 1934.
- ◎Lauth, Reinhard [1975], Die Entstehung von Schellings Identitätsphilosophie in der Auseinandersetzung mit Fichtes Wissenschaftslehre, Alber.
- ◎Lindner, Herbert [1960], Das Problem des Spinozismus im Schaffen Goethes und Herders, Arion (Beiträge zur deutschen Klassik, Abhandlungen, Bd. 11).
- ◎Lorenz, Stefan [1997], De mundo optimo. Studien zu Leibniz' Theodizee und ihrer Rezeption in Deutschland (1710-1791) (Studia Leibniziana. Supplementa, Vol. XXXI).
- ◎Scholem, Gershom [1984], Die Wachtersche Kontroverse über den Spinozismus und ihre Folgen, in: Karlfried Gründer, und Wilhelm Schmidt-Biggemann, (Hg.), Spinoza in der Frühzeit seiner religiösen Wirkung, L.Schneider (Wolfenbütteler Studien zur Aufklärung, Bd. XII).
- ◎Schürmann, Eva, Waszek, Norbert und Weinreich, Frank (Hg.) [2002], Spinoza im Deutschland des achtzehnten Jahrhunderts, Frommann-Holzboog (Spekulation und Erfahrung, Abt. II, Bd. 44).
- ◎Strauss, Leo [1974], Einleitung zu "Morgenstunden" und "An die Freude Lessings", in: MS, Bd. III-2.
- ◎Timm, Hermann [1974], Gott und die Freiheit. Studien zur Religionsphilosophie der Goethezeit, Bd. I, Die Spinozarenaissance, Vittorio Klostermann (Studien zur Philosophie und Literatur des 19. Jahrhunderts, Bd. XXII).
- ◎Totok, Wilhelm [1986], Theodizee bei Leibniz und Lessing, in: Beiträge zur Wirkungs- und Rezeptionsgeschichte von Gottfried Wilhelm Leibniz, Hg. von Albert Heinekamp (Studia Leibniziana. Supplementa, Vol. XXVI).
- ◎Zimmerli [1986], Von der Verfertigung einer philosophische-historischen Grösse: Leibniz

in der Philosophiegeschichtsschreibung des 18. Jahrhundert, in: Heinekamp(Hg.) [1986].

【編著者50音順】

- ◎笠原賢介 [1985] 「初期レッシングのスピノザ理解」『法政大学教養部紀要』54号.
- ◎工藤喜作 [1980] 『近代哲学研究序説』八千代出版.
- ◎クラマー, コンラート [1986] 「スピノザの全一論」辻村公一編『一即一切——日独哲学コロキウム論文集』創文社所収.
- ◎ディルタイ, ヴィルヘルム (柴田治三郎訳) [1961] 『体験と創作 (上)』岩波文庫.
- ◎平尾昌宏 [2004a] 「啓蒙期ドイツのスピノザ主義」『スピノザーナ』5号.
- ◎平尾昌宏 [2004b] 「形式・体系・自然」松山寿一・加國尚志編『シェリング自然哲学への誘い』晃洋書房.
- ◎平尾昌宏 [2006a] 「自由における対話」『立命館文学』595号.
- ◎平尾昌宏 [2006b] 「<人間的なもの>の存在論的境位」『シェリング年報』14号.
- ◎平尾昌宏 [2007] 「スピノザを巡るシェリングとヤコービとの対話」『スピノザーナ』8号, 近刊.
- ◎安酸敏真 [1998] 『レッシングとドイツ啓蒙』創文社.
- ◎良知力 [1956] 「レッシングのスピノザ主義の社会的性格」『一橋論叢』36巻4号.